

# 人魚のひいさま

DEN LILLE HAVFRUE

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫



はるか、沖合へでてみますと、海の水は、およそうつくしいやぐるまぎくの花びらのように青くて、あくまですきとおったガラスのように澄みきっています。でも、そこは、ふかいのなんのといつて、どんなにながく綱つなをおろしても底にとどかないというくらいふかいのです。お寺の塔を、いったい、いくつかさねて積み上げたら、水の上までとどくというのでしょうか。そういうふかい海の底に、海のおとめたち——人魚のなかまは住んでいるのです。

ところで、海の底なんて、ただ、からからな砂地があるだけだろうと、そうきめてしまっではいけません。どうして、そこには、

世にもめずらしい木や草がたくさんしげっていて、そのじくや葉のしなやかなことといったら、ほんのかすかに水がゆらいだのにも、いつしよにゆれて、まるで生きものがうごいているようです。ちいさいのも、おおきいのも、いろんなおさかなが、その枝と枝とのなかをつうい、つういとくぐりぬけて行くところは、地の上で、鳥たちが、空をとびまわるのとかわりはありません。この海の底をずっと底まで行ったところに、海の人魚の王さまが御殿をかまえています。その御殿の壁は、さんごでできていて、ほそながく、さきのがった窓は、すきとおったこはくの窓でした。屋根は貝がらでふけていて、海の水がさしひきするにつれて、貝のふたは、ひとりであいたりしまったりします。これはなかなか



うつくしいみものでした。なぜといって、一枚一枚の貝がらには、それひとつでも女王さまのかんむりのりっぱなそうしよくになるような、大きな真しんじゆ珠がはめてあるのですからね。

ところで、この御殿のあるじの王さまは、もうなが年のやもめぐらしで、そのかわり、年とつたおかあさまが、いつさい、うちのことを引きうけておいでになりました。このおかあさまは、りこうな方でしたけれど、いちだんたかい身分をほこりたさに、しつぽにつける飾りのかきをごじぶんだけは十二もつけて、そのほかはどんな家柄のものでも、六つから上つけることをおゆるしになりませんでした。——そんなことをべつにすれば、たとほめられてよい方でした。とりわけ、お孫さんにあたるひいさまたち

のおせわをよくなさいました。それはみんなで六人、そろってきれいなひいさんたちでしたが、なかでもいちばん下のひいさまが、たれよりもきりようよしで、はだはばらの花びらのようにすきとおつて、きめがこまかく、目はふかいふかい海のようにまっ青でした。ただほかのひいさまたちとおなじように、足というものがなくて、そこがおさかなの尾になっていました。

ながいまる一日、ひいさまたちは、海の底の御殿の、大広間であそびました。その壁からは、生きた花が咲きだしていました。大きなこはくの窓をあけると、おさかながつういとはいつて来ます。それはわたしたちが窓をあけると、つばめがとび込んでくるのに似ています。ただ、おさかなは、すぐと、ひいさまたちの所

まで泳いで行つて、その手からえさをとつてたべて、なでいたわつてもらいました。

御殿のそとには、大きな花園があつて、はでにまつ赤な木や、くらいあい色の木がしげつていました。その木の実は金のようにかがやいて、花はほのおのようにもえながら、しじゅうじくや葉をゆらゆらさせていました。海の底は、地面からしてもうこまかい砂でしたが、それは硫黄ゆおうの火のように青く光りました。そこでは、なにもかも、ふしぎな、青い光につつまれているので、それはふかい海の底にいるというよりも、なにか宙ちゆうに浮いていて、上にも下にも青空をみているようでした。海のないでいるときには、お日さまが仰げました。それはむらさきの花のようで、そのうて



なからながれだす光が、海の底いちめんひろがるようにおもわれ  
ました。

ひいさまたちは、めいめい、花園のなかに、ちいさい花壇かだんをも  
つていて、そこでは、すき自由に、掘りかえすことも植えかえる  
こともできました。ひとりのひいさまは、花壇を、くじらの形に  
つくりました。するともうひとり、じぶんのは、かわいい人魚  
に似せたほうがいいとおもいました。ところが、いちばん下のひ  
いさまは、それをまんまるく、そっくりお日さまのかたちにし  
らえて、お日さまとおなじようにまつ赤に光る花ばかりを咲かせ  
ました。このひいさまはひとりちがつて、ふしぎなものしずかな、  
かんがえぶかい子でした。ほかのおねえさまたちが、難船した船

からとつて来たためずらしい品物をならべたててよろこんでいるとき、このひいさまだけは、うつくしい大理石の像をひとつとつて来て、大空のお日さまの色に似た、ばら色の花の下に、それをおいただけでした。それはまっ白にすきとおる石をきざんだ、かわいらしい少年の像で、難破<sup>なんぱ</sup>して海の底にしずんだ船のなかにあつたものでした。この像のわきに、ひいさまは、ばら色したしだれやなぎを植えました。それがうつくしくそだつて、そのみずみずしい枝が像をこして、むこうの赤い砂地の上までたれました。そこに濃<sup>こ</sup>いむらさきの影ができて、枝といっしょにゆれました。それはまるで、こずえのさきと根とがからみあつて、たわむれているようにみえました。

このひいさまにとって、海の上にある人間の世界の話をきくほど、おおきなよろこびはありません。おばあさまにせがむと、船のことや、町のことや、人間やけもののことや、知っていらつしやることはなにもかも話してくださいました。とりわけ、ひいさまにとってめずらしくおもわれたのは、海の底ではついななことなのに、地の上では、お花がにあっていうことでした。それと、森がみどり色していて、その森のこずえのなかに、おさかなが、高い、かわいらしい声で歌がうたえて、それがきくひとの耳をたのしくするということでした。その、おばあさまがおさかなとおつしやったのは、小鳥のことでした。だって、ひいさまたちは、小鳥というものをみたことがないので、そういつて

話さなければわからないでしょう。

「まあ、あなたたち、十五になつたらね。」と、おばあさまはいました。「そのときは、海の上へ浮かび出ていいおゆるしをあげますよ。そうすれば、岩に腰をかけて、お月さまの光にひたることもできるし、大きな船のおるところもみられるし、森や町だつてみられるようになるよ。」

来年は、いちばん上のおねえさまが、十五になるわけでした。でも、ほかのおねえさまたちは——そう、めいめい、一年ずつ年がちがっていましたから、いちばん下のひいさまが、海の底からあがつていつて、わたしたちの世界のようすをみることになるまでは、まる五年も待たなければなりません。でも、ひとりがい

けば、ほかのひとたちに、はじめていった日みたこと、そのなか  
でいちばんうつくしいとおもったことを、かえつて来て話す約束  
ができました。なぜなら、おばあさまのお話だけでは、どうも物  
たりなくて、ひいさまたちの知りたいとおもうことが、だんだん  
おおくなつて来ましたからね。

そのなかでも、いちばん下のひいさまは、あいにく、いちばん  
ながく待たなくてはならないし、ものしずかな、かんがえぶかい  
子でしたから、それだけたれよりもふかくこのことをおもいつづ  
けました。いく晩もいく晩も、ひいさまは、あいている窓ぎわに、  
じつと立ったまま、くらいあい色した水のなかで、おさかながひ  
れやしつぽをうごかして、およぎまわっているのをすかしてみ

いました。お月さまと星もみえました。それはごくよわく光っているだけでしたが、でも水をすかしてみるので、おかでわたしたちの目にみえるよりは、ずっと大きくみえました。ときおり、なにかまつ黒な影のようなものが、光をさえぎりました。それが、くじらがあたまの上をおよいでとおるのか、またはおおぜい人のせた船の影だということは、ひいさまにもわかっていました。この船の人たちも、はるか海の底に人魚のひいさまがいて、その白い手を、船のほうへさしのべていようとは、さすがにおもいもつかなかつたでしょう。

さて、いちばん上のひいさまも、十五になりました。いよいよ、海の上に出られることになりました。

このおねえさまがかえつて来ると、山ほどもおみやげの話がありましたとおあさが、でも、なかでいちばんよかったのは、波のしずかな遠浅の海に横になりながら、すぐそばの海ぞいの大きな町をみていたことであつたといひます。そこでは、町のあかりが、なん百とない星の光のようにかがやいていましたし、音楽もきこえし、車や人の通るとよめきも耳にはいりました。お寺のまるい塔と、とがった塔のならんでいるのが見えたし、そこから、鐘の音もきこえて来ました。でも、そこへ上がっていくことはできせんから、ただなにくれと、そういうものへのあこがれで、胸をいっぱいにしてかえつて来たということでした。

まあ、いちばん下のひいさまは、この話をどんなに夢中できい

たことでしよう。それからというもの、あいた窓ぎわに立って、くらしい色の水をすかして上を仰ぐたんびに、このひいさまは、いろいろの物音とよめきのする、その大きな町のことをかんがえました。するうち、そこのお寺の鐘の音が、つい海の底までも、ひびいてくるようにおもいました。

そのあくる年、二ばんめのおねえさまが、海の上へあがって行って、好きな所へおよいでいっていい、おゆるしができました。このおねえさまが、浮き上がると、そのときちようどお日さまが沈みましたが、これこそいちばんうつくしいとおもったものでした。大空がいちめん金をちらしたようにみえて、その光をうつした雲のきれいだったこと、とてもそれを書きあらわすことばはないと



いいました。くれないに、またむらさきに、それがあたまの上をすうすう通つてながれていきました。けれども、その雲よりももつとはやく、野のはくちよう」は底本では「はくちよう」のむれが、それはながい、白いうすものが空にただようように、しずんで行く夕日を追つて、波の上をとんでいきました。このおねえさまも、これについてまけずにおよいでいきましたが、そのうち、お日さまはまったくしずんで、ばら色の光は、海の上からも、雲の上からも消えていきました。

また次の年には、三ばんめのおねえさまが上がつていきました。このおねえさまは、たれよりもむこうみずな子でしたから、大きな川が海にながれだしている、その川口をさかのぼつておよい

でいってみました。そこにはぶどうのつるにおおわれたうつくしいみどりの丘がみえました。むかしのお城やしょうえん園が、みごとに茂った森のなかからちらちらしていました。いろんな鳥のうたいかわす声も聞きました。するうちお日さまが、照りつけて来たので、ほてった顔をひやすために、たびたび水にもぐらなくてはなりません。水がよどんでちいさな入江になった所で、かわいい人間のこどもたちのかたまつて、あそんでいるのに出あいました。まるはだかで、かけまわつて、ぼちやぼちや水をはねかしました。いっしょにあそぼうとすると、みんなおどろいて逃げていってしまいました。するとそこへ、ちいさな、まつ黒な動物がでて来ました。これは犬でしたが、犬なんて、みたことはなか

つたし、いきなり、はげしくほえかかって来たので、こわくなつて、またひろい海へおよいでもどりました。でも、あのうつくしい森もみどりの丘も、それから、おさかなのしっぽももっていないくせに、水におよげるかわいらしいこどもたちのことをも、このひいさまは、いつまでもわすれることができませんでした。

さて、四ばんめのおねえさまは、それほどむこうみずではありませんでしたから、そこで、ひろい大海のまんなかに居づくまつたままでしたが、でもそこがどこよりもいちばんうつくしかつたと話しました。もうぐるりいちめん、なんマイルと先の知れないとおくまで見はらせて、あたまの上の青空は、とほうもなく大きなガラス鐘のようなものでした。船というものもみました。でも、

それはただ遠くにはなれていて、まるでかもめのようにみえていました。それからおどけもののいるかが、とんぼがえりしたり、大きなくじらが鼻のあなから、しおをふきだして、そのへんいちめに、なん百とない噴水がふきだしたようでした。

こんどは、五ばんめのおねえさまの番になりました。このひいさまは、おたん生日が、ちようど冬のあいだでしたので、ほかのおねえさまたちのみなかったものを見ました。海はふかいみどり色をたたえて、その上に、氷の山がまわりをとりまいて浮いていました。そのひとつびとつが白く光つて、まるで真しんじゆ珠の山のようでしたが、それも人間の建てたお寺の塔よりもずっと高いものだつたといいました。それがまたきみようともふしぎともいいよ

うのないかたちをして、どれもダイヤモンドのようにちかちかがやいていました。このおねえさまは、そのなかのいちばん大きい山に腰をかけて、そのながい髪の毛を風のなぶるままにさせていますと、そのまわりに寄つて来た帆船ほふねの船頭は、みんなおどろいて、船をかえしました。でも、夕方になると空は雲でつつまれて、かみなりが鳴つたり、いなづまが走つたり、まつ黒な波が大きな氷の山を高くつき上げて、いなづまのつよい光にあてました。のこらずの船が帆をおろして、そこには、おそれとおののきとがたかまつていました。けれども、人魚のむすめは、へいきで、ちかちか光る氷の山の上に腰をのせたまま、かがやく海の上に、いなづま形に射かける稲いなびかり光の青い色をながめていました。

さて、こうして、おねえさまたちは、めいめいに、はじめて海の上へ浮かんで出てみた当座とうざこそ、まのあたりみた、めずらしいもの、うつくしいものに心をうばわれました。けれども、いまは一人まえのむすめになって、いつどこへでも好きかつてにいかれるとなると、もうそれも心をひかなくなりしました。またうちがこいしくなつて来て、やがて、ひと月もすると、やはり海の底ほどけしきのいい所はどこにもないし、うちほどけつこうな住居すまいはないわ、といいあうようになりました。

もういく晩も、夕方になると、五人のおねえさまたちは、おたがい手を組んで、つながつて、水の上へあがつていきました。みんな、どんな人間もおよばないうつくしい声をもっていました。

あらしが来かけると、やがて船はしずむほかないことが分かつて  
いますから、みんなして船のそばへおよいでいって、やさしい歌  
をうたつてやりました。海の底がどんなにうつくしいか、だから  
船人たちはしずむことをそんなにこわがるにはおよばない、そう  
うたつてやるのです。でも、そのことばは、人間には分かりませ  
ん。それをやはりあらしの音だとおもっていました。それにまた、  
しずんでいくひとたちが、しずみながら海の底をみるなんて、そ  
んなうまいわけにはいかないのです。なぜなら、船がしずむと、  
それなり船人はおぼれてしまいます。そうして、しかばねになつ  
て、人魚の王さまの御殿へはこばれてくるのですもの。

きょうだいたちが、こうして手をつないで、夕方、水の上へあ

がつていくとき、いちばん下のひいさまだけは、いつもひとりぼつちあとにのこっていました。そうしてみんなのあとをみおくつていると、なんだか泣かずにはいられない気持ちになりました。けれども、海おとめには、涙というものがないのです。そのため、よけい、せつないおもいをしました。

「ああ、あたし、どうかしてはやく十五になりたいあ。」と、このひいさまはいいました。「あたしにはわかつている。あの上の世界でも、そこにうちをつくって住んでいる人間でも、あたしきつと好きになれるでしょう。」

するうち、とうとう、ひいさまも十五になりました。

「さあ、いよいよ、あなたも、わたしの手をはなれるのだよ。」



と、ごいんきよのおばあさまがおっしゃいました。「では、いらつしやい、おねえさまたちとおなじように、あなたにもおつくりをしてあげるから。」

こういつて、おばあさまは、白ゆりの花かんむりを、ひいさまの髪にかけました。でも、その花びらというのが、一枚一枚、真ま珠じゆを半分にしたものでした。それからまだおばあさまは、八つまで、大きなかきを、ひいさまのしっぽにすいつかせて、それを高こう貴きな身分のしるしにしました。

「そんなことをおさせになって、あたし、いたいわ。」と、ひいさまはいいました。

「身分だけにかざるのです。すこしはがまんしなければね。」と、

おばあさまは、おっしやいました。ああ、こんなかざりものなんか、どんなにふり捨てたかつたでしょう。おもたい花かんむりなんか、どんなにほうりだしたかつたでしょう、ひいさまは、花壇に咲いている赤い花のほうが、はるかよく似合うことはわかっていました。でも、いまさら、それをどうすることもできません。

「いつてまいます。」と、ひいさまはいつて、それはかるく、ふんわりと、まるであわのように、水の上へのぼっていききました。

ひいさまが、海の上にはじめて顔をだしたとき、ちようどお日さまはしずんだところでした。でもどの雲もまだ、ばら色にも金色にもかがやいていました。そうして、ほの赤い空に、よいの明み星よっじょうが、それはうつくしくきらきら光っていました。空気はな

ごやかに澄んでいて、海はすっかりないでいました。そこに三本マストの大きな船が横たわっていました。そよとも風がないので、一本だけに帆が上げてあつて、それをとりまいて、水夫たちが、帆綱ほづなや帆げたに腰をおろしていました。

そのうち、音楽と唱歌の聲がして来ました。やがて夕やみがせまってくる、なん百とない色がわりのランプに火がともつて、それは各国の国旗が、風になびいているように見えました。人魚のひいさまは、その船室の窓の所までずんずんおよいでいきました。波にゆり上げられるたんびに、ひいさまは、水晶のようにすきとおつた窓ガラスをすかして、なかをのぞくことができました。そこには、おおぜい、晴着はれぎを着かざつた人がいました、でも、そ

のなかで目立ってひとりうつくしいのは、大きな黒目をしたわかい王子でした。王子はまだ満十六歳より上にはなっていない。ちようどきようがおたん生日で、このとおりさかなお祝をして、いるしだいでした。水夫たちは、甲板でおどっていました。そこへ、わかい王子がでてくると、なん百とない花火が打ち上げられて、これがひるまのようにかがやいたので、ひいさまはびっくりして、いったん水のなかにしずみました。けれどまたすぐ首をだすと、もうまるで大空の星が、いちどにおちかかってくるようにおもわれました。こんな花火なんというものを、まだみたことはありませんでした。大きなお日さまがいくつもいくつも、しゅうしゅういいながらまわりました。すばらしくきれいな火魚が青い

なかそら

中空にはね上がりました。そうして、それがみんな鏡のよう  
たいらな海の上にうつりました。それよりか船の上はとてもあか  
るくて、甲板の上の帆綱ほづなが、ごくほそいのまで一本一本わかるく  
らいだ、とみんなはいつていました。でも、まあ、わかい王子の  
ほんとうにりっぱなこと。王子はたれとも握手あくしゅをかわして、に  
ぎやかに、またにこやかにわらっていました。そのあいだも、音  
楽は、この晴れがましい夜室にひびきつづけました。

夜がふけていきました。それでも、人魚のひいさまは、船から  
も、そのうつくしい王子からも、目をはなそうとはしませんで  
した。色ランプは、とうに消され、花火ももう上がらなくなりま  
した。祝砲もとどろかなくなりました。ただ、海の底で、ぶつぶ

つごそごそ、ささやくような音がしていました。ひいさまは、やはり水の上ののつかって、上に下にゆられながら、船室のなかをのぞこうとしていました。でも、船はだんだんはやくなり、帆は一枚一枚はられました。するうち、波が高くなって来て、大きな黒雲がわきだしました。遠くでいなづまが、光りはじめました。やれやれ、おそろしいあらしになりそうです。それで水夫たちはおどろいて、帆をまき上げました。大きな船は、荒れる海の上をゆられゆられ、とぶように走りました。うしおが大きな黒山のようになたかくなって、マストの上のしかかろうとしました。けれど、船は高い波と波のあいだを、はくちよう」は底本では「はくちよう」のようにふかくくぐるかとおもうと、またもりあがる

高潮の上につき上げられてでて来ました。これは海おとめの身にする、なかなかおもしろい見ものでしたが、船の人たちはどうしてそれどころではありません。船はぎいぎいがたがた鳴りました。さしもがんじょうな船板も、ひどく横腹を当てられて曲りました。マストはまんなかからぽつきりと、まるであしかなんぞのようにもろく折れました。船は横たおしになって、うしおがどどつと、所かまわず船にながれ込みました。ここではじめて、人魚のひいさまも、船の人たちの身の上のあぶないことが分かりました。そればかりかじぶんも、水の上におしながされた船のはりや板きれにぶつからない用心しなければなりません。ふと一時、すみをながしたようなやみ夜になって、まるでものがみえな

くなりました。するうち、いなびかりがしはじめるとまたあかるくなつて、船の上のようすが手にとるようにわかりました。みんなどうにかして助かろうとしてあがいていました。わかい王子のすがたを、ひいさまはさがしもとめて、それがちらりと目にはいつたとたん、船がふたつにわれて、王子も海のそこふかくしずんでいきました。はじめのうち、ひいさまはこれで王子がじぶんの所へ来てくれるとおもつて、すっかりたのしくなりました。でも、すぐと、水のなかでは、人間が生きていけないことをおもいだしました。そうすると、この王子も死んで、おとうさまの御殿にいきつくほかはないとおもいました。まあ、この人を死なせるなんて、とんでもないことです。そこで、波のうえにただようはりや



板きれをかきわけかきわけ、万一、ぶつかってつぶされることなぞわすれて、夢中でおよいでいきました。で、いったん水のそこふかくしずんで、またたかく波のあいだに浮きあがったりして、やつと、わかい王子の所までおよいでいけましたが、王子は、もうとうに荒れくるう海のなかで、およぐ力がなくなっていて、うつくしい目もとじていました。人魚のひいさまが、そこへ来てくれなかつたら、それなり死ぬところだったでしょう。ひいさまは、王子のあたまを水の上にたかくささげて、あとは、波が、じぶんと王子とを、好きな所へはこぶままにまかせました。

そのあけがた、ひどいあらしもやみました。船のものは、木ツばひときれのこつてはいませんでした。お日さまが、まっかにか

がやきながら、たかだかと海のうえにおのぼりになりますと、それといっしょに、王子のほおにもさつと血の気がさしてきたようにおもわれました。でも、目はとじたままでした。人魚のひいさまは、王子のたかい、りっぱなひたいにほおをつけて、ぬれた髪の毛をかき上げました。こうして見ると、海そのこの、あのかわいい花壇にすえた大理石の像に似ていました。ひいさまは、もういっぺんほおづけして、どうかいのちのありますようにとねがっていました。たかい、青い山山のいただきに、ふんわり雪がつもつて、きらきら光っているのが、ちょうどはくちようが寝ているようでした。そのふもとの浜ぞいには、みどりみどりした、うつくしい森がしげっていて、森をうしろに、お寺か、しゅうどういん修道院か

よくわからないながら、建物がひとつ立っていました。レモンとオレンジの木が、その園にしげっていて、門の前には、せいのかいしゆるろの木が立っていました。海の水はそこで、ちいさな入江をつくっていて、それは鏡のようにたいらなまま、ずっとふかく、すのところまで入りこんでいて、そこにまつしろに、こまかい砂が、もり上がっていました。ひいさまは、王子をだいてそこまでおよいでいって、ことに、あたまの所をたくくして、砂の上になかせました。これはあたたかいお日さまの光のよくあたるようにという、やさしい心づかいからでした。

そのとき、その大きな白い建てもものなかから、鐘がなりだしました。そうして、その園をとおって、わかい少女たちがおお

ぜい、そこへでて来ました。そこで、人魚のひいさまは、ずっとうしろの水の上に、いくつか岩の突き出ている所までおよいでいて、その陰にかくれました。たれにも顔のみえないように、髪の毛にも胸にも、海のアワをかぶりしました。こうしてきのどくな王子のそばへ、たれがまずやってくるか、気をつけてみていました。

もうまもなく、ひとりのわかいむすめが、そこへ来ました。むすめはたいへんおどろいたようでしたが、ほんのちよつとのあいだで、すぐとほかの人たちをつれて来ました。人魚のひいさまがみていますと、王子はとうとういのちをとりとめたらしく、まわりをとりまいているひとたちに、にんまりほほえみかけました。

けれど、ひいさまのほうへは笑顔をみせませんでした。ひいさまにたすけてもらったことも、王子はまるで知りませんでした。ひいさまは、ずいぶんかなしくおもいました。そのうち、王子は、大きな建てもものなかへはこばれていってしまふと、ひいさまも、せつないおもいをしながら水にせずんで、そのまま、おとうさまの御殿へかえっていききました。

いったいに、いつもものしずかな、ふかくおもい込むたちのひいさまでしたけれど、これからは、それがよけいひどくなりしました。おねえさまたちは、この妹が、海の上ではじめて来て来たものがなんであったか、たずねましたが、ちよつぴりともその話はありませんでした。

晩に、朝に、いくたびとなく、このひいさまは、王子をおいて来た浜ちかく上がって行ってみました。園のくだものが実のつて、やがてもがれるのもみました。山山のいただきに、雪の消えるのもみました。けれども、ひいさまは、もう王子のすがたをみることはありませんでした。そうして、そのたんびに、いつもよけいせつないおもいでかえって来ました。こうなると、ただひとつのたのしみは、れいのちいさな花壇のなかで、うつくしい王子に似た大理石の像に、両腕をかけることでした。けれども花壇の花にはもうかまわなくなりました。それは、路のうえまで茂りほうだいしげって、そのながくのびたじくや葉を、あたりの木の枝に、所かまわずからみつけましたから、そこらはどこも、おぐらくな



っていました。

とうとう、いつまでもこうしているのが、ひいさまにはたえられなくなりしました。それで、ひとりのおねえさまにうちあけますと、やがて、ほかのおねえさまたちの耳にもはいました。でも、このひいさまたちと、そのほかに二、三人の、海おとめたちのほかたれ知るものはなく、そのおとめたちも、ただごく仲のいいお友だちのあいだでその話をしただけでした。ところで、そのお友だちのうちに、ひとり、王子を知っているむすめがありました。それから、あの晩、船の上でお祝のあったこともみていました。そのむすめは、王子がどこから来たひとで、その王国がどこにあるかということまで知っていました。



「さあ、いってみましようよ。」と、おねえさまたちは、いちばん下のちいさい妹をさそいました。そうして、おたがい腕を肩にかけて、ながい列を組んで、海の上に着き上がりました。そこは王子の御殿のあるときいた所でした。

その御殿は、クリーム色に光をもった石で建てたものでしたが、そののいくつかある大理石の階段のうち、ひとつはすぐと海へおりるようになっていました。平屋根の上には、一だんたかく、金めつきしたりっぱな<sup>まるやね</sup>円屋根がそびえていました。建物のぐるりをかこむ<sup>まるばしら</sup>円柱のあいだに、いくつもいくつも大理石の像が、生きた人のようにならんでいました。たかい窓にはめ込んだあかいガラスをすかすと、なかのりっぱな広間がみえました。その広

間の壁には、高価な絹のとぼりや壁かけがかかっていた。壁という壁は、名作の画でかざられていて、みるひとの目をたのしませました。こういう広間のいくつかあるなかの、いちばんの広間のまんなかに、大きな噴水がふきだして、そのしぶきは、ガラスの円天井まるてんじょうまで上がっていました。その天井からは、お日さまがさしこんで、噴水の水と大水盤すいばんのなかにういている、うつくしい水草の上にきらきらしていました。

こうして王子のすみかがわかると、それからは、もう夕方から夜にかけて、毎晩のように、その水の上に、妹のひいさまはでてみました。もうほかの人魚たちのいきえない丘ちかくの所までも、およいでいきました。ついには、せまい水道のなかにまでく

ぐつて、そのながい影を水の上に投げている大理石の露台ろだいの下までもいってみました。そこにじいっといて、みあげると、わかい王子が、じぶんひとりいるつもりで、あかるいお月さまの光のなかに立っていました。

夕方、たびたび、王子はうつくしいヨットに帆をはって、音楽をのせて、風に旗を吹きなびかせながら、海の上を走らせるところを、ひいさまは見ました。ひいさまは、それを青青としげったあしの葉のあいだからすきみしました。すると風が来て、ひいさまの銀いろしたながいヴェールをひらひらさせました。たまにそれを見たものは、はくちようがつばさをひろげたのだとおもいました。

夜な夜な、船にかがりをたいて、りように出るりようしたちからも、ひいさまはたびたび、わかい王子のいうわさをききました。そうして、そんなにもほめものになっていくひとが波の上に死にかけてただよっているところを、じぶんがすくつたのだともってうれしくなりました。それから、あのととき、あの方のおつむりは、なんておだやかにあたしの胸のうえにのっていたことかしら、それをあたしはどんなに心をこめて、ほおずりしてあげたことかしらとおもっていました。そのくせ、王子のほうでは、むろんそういうことをまるで知りませんでした。つい、夢にすらみてはくれないのです。

だんだんに、だんだんに、人間というものが、とうとくおもわ

れて来ました。だんだんに、だんだんに、どうぞして人間のなかまにはいつていきたいと、ねがうようになりました。人間の世界は、人魚の世界にくらべて、はるかに大きくおもわれました。人間は、船にのって海の上をとびかけることもできますし、雲よりもたかい山にのぼることもできました。人間のいる国ぐには森も畑もあつて、それは人魚の目のとどかないとおくまではてしなくひろがつていました。そこで、このひいさまの知りたいことは山ほどあつても、おねえさまたちのちからでは、そののこらずにこたえることはできません。ですから、おばあさまにうかがうことにしました。このあばあさまはさすがに、上の世界のことをずっとよく知っておいでになりました。上の世界というのは、この

おばあさまが、まことにうまく、海の上の国ぐにに名づけたものでした。

「ねえ、おばあさま、人間は、水におぼれさえしなければね、」  
と、ひいさまはたずねました。「それはいつまでも生きられるのでしよう。あたしたち海のそのものようには死なないのでしよう。」

「どうしてさ。」と、おばあさまは、おつしやいました。「人間だって、やはり死ぬのですよ。わたしたちよりも、かえってじゅみ寿命じゆうめいはみじかいくらいです。わたしたちは三百年まで生きられま  
す。ただ、いったん、それがおわると、それなり、水の上のあわ  
になつて、おたがいむつまじくして来たひとたちのなかに、お墓

ひとつのこしては行けません。わたしたちには、死なないたましいというものがないのだよ。またの世に生まれかわるということがないのだよ。いわば、あのみどり色したあしのようなもので、いちど刈りとられると、もう二どと青くなることがない。そこへいくと、人間にはたましいというものがあつて、それがいつまでも生きている、からだか土にかえつてしまったあとでも、たましいは生きている。それが、澄んだ大空の上にのぼって、あのかきらきら光るお星さまの所へまでもものぼって行くのです。ちょうど、わたしたちが、海の上に着き上がって、人間の国をながめるように、人間のたましいは、わたしたちにとっても見られない、知らない神さまのお国へうかび上がっていくのです。」

「なぜ、あたしたち、死なないたましいをさずからなかつたの。」と、人魚のひいさまは、かなしそうにいいました。「あたし、なん百年の寿命なんてみんなやってしまってもいいわ。そのかわり、たった一日でも人間になれて、死んだあとで、その天国とやらの世界へのぼるしあわせをわけてもらえるならね。」

「まあ、そんなことをおもうものではないよ。」と、おばあさまはおつしやいました。「わたしたちは、あの上の世界の人間なんかより、ずっとしあわせだし、ずっといいものなのだからね。」

「でも、あたし、やはり死んであわになつて、海の上について、もう波の音楽もきかれないし、もうきれいな花もみられないし、赤いお日さまもみられなくなるのですもの。どうにかして、なが



いいのちのたましいを、さずかるくふうつてないものかしら。」

「それはあるまいよ。」と、おばあさまはいいました。「だがね、こういうことはあるそうだよ。ここにひとり人間があつてね、あなたひとりが好きになる。そう、その人間にとっては、あなたというものが、おとうさまやおかあさまよりもいいものになるのだね。そうして、それこそありつたけのまごころとなさけで、あなたひとりのことをおもつてくれる。そこで、お坊さまが来て、その人間の右の手をあなたの右の手にのせて、この世も、ながいながいのちの世もかわらない、かたい約束を立てさせる。そうなるど、その人間のたましいがあなたのからだのなかにながれこんで、その人間のしあわせを分けてもらえることになる。しかも、その

人間はあなたにたましいを分けても、じぶんのたましいはやはりなくさずにもつているというのさ。だが、そんなことはけつしてありっこないよ。だって、この海のそこの世界でなによりうつくしいものになっているおさかなのしっぽを、地の上ではみにくいものにしていくというのだもの。それだけのよしあしすら、むこうはわからないものだから、むりに二本、ぶきような、つつかい棒みたいなものを、かわりにつかって、それに足という名をつけて、それでいいつもりでいるのだよ。」

そういわれて、人魚のひいさまも、いまさらため息しながら、じぶんのおさかなの尾にいじらしくながめ入りました。

「さあ、陽気になりました。」と、おばあさまはいいました。

「せつかくさずかることになっている三百年の寿命です。そのあいだは、好きにおどつてはねてくらすことさ。それだけでもずいぶんながい一生ですよ。それだけに、あとはきれいさっぱり、安心して休めるといふものだ。今夜は宮中舞踏会ぶとうかいをやりましょう。」

さて、この舞踏会が、なるほど、地の上の世界では見られないごうかなものでした。大きな舞踏の間の壁と天てんじょう井とは、あつぽつたい、そのくせ、よくすきとおつたガラスで張りめぐらされていました。ばら色や草みどり色した大きな貝がらが、なん百としれず、四方の壁にかけつらねてあつて、そのひとつひとつに、青いほのおの火がともっていました。それが広間をくまなくてら

した上、壁のそとへながれだす光が、すっかり海をあかるくしました。ですから、大も小もなく、それこそかぞえきれないほどのさかなが、ガラスの壁にむかつておよいでくるのが、手にとるようにみえました。うろこをむらさき紅の色に光らせてくるのもありました。銀と金の色にかがやいてくるものもありました。——ちようど、広間のまん中のところを、ひとすじ、大きくゆるやかな海のながれがたらぬいている、その上で、男の人魚たちと女の人魚たちが、人魚だけのもっているやさしい歌のふしでおどつていました。こんなうつくしい歌声が、地の上の人間にあるでしょうか。あのいちばん下の人魚のひいさまは、そのなかでも、たれおよぶものがないうつくしい声でうたいました。みんないちど

に手をたたいて、その歌をほめそやしました。そのせつな、さすがにこのひいさまも心がうかれました。それは、地の上はもちろん、海のなかにもまたふたりとないうつくしい声を、じぶんももっていることが分かったからでした。でも、すぐとまた、上の世界のことをかんがえるいつものくせに引きこまれました。あのおつくしい王子のことをわすれることはできませんし、あのひととおなじに、死なないたましいをもっていないことが心をくるしめました。そこで、こつそり、ひいさまは、おとうさまの御殿をぬけだしました。そうして、たれもそこで、歌って、陽気にうかれていまするまに、しぶんひとり、れいのちいさい花壇のなかに、しょんぼりすわっていました。そのとき、ひとこえ角つのぶえ笛のひびきが、

海の水をわたって来ました。その音をききながら、ひいさまはおもいました。

「まあ、いまごろ、あの方きつと、帆船ほふねをはしらせていらつしやるのね。ほんとうに、おとうさまよりもおかあさまよりももっと好きなあの方が、しじゅうあたしのころからはなれないあの方が、そのお手にあたしの一生の幸福をささげようとねがつているあの方が、あそこにいらつしやるのね。あたし、どうぞして、死なないたましいが手にはいるものなら、どんなことでもしてみろわ。そうだ、おねえさまたちが、御殿でおどつていらつしやるうち、あたし、海の魔女まじよの所へ行ってみよう。いつもはずいぶんこわいのだけれど、でもきつと、あの女なら相談相手になって、い

いちえをかしてくれるでしょう。」

そこで、人魚のひいさまは、花園をでて、ぶつぶつあわ立つうず巻の流れのなかへむかつていきました。このうず巻のむこうに、魔女のすまいがありました。こんな道をとおるのははじめのこ  
とでした。そこには花も咲いていず、藻草もぐさも生えていません。ただむきだしな灰いろの砂地が、うずのながれの所までつづいていて、そのながれはうなりを立てて、水車の車輪のようにくるりくるりまわっていました。そうして、このうず巻のなかにはいつてくるものは、なんでもつかまえて、こなごなにくだいて、ふかいふちに引きこみました。このはげしいうずのながれの、しかもまん中をとおって行くほかに海の魔女の領りょうぶん分にはいる道はあり

ませんし、それも、ながいあいだ、ぶつぶつ煮えて、あわだつて  
いるどろ沼をわたって行くよりほかに道はないのです。この沼を、  
じぶんのすくも田という名で魔女はよんでいました。これを行き  
つくした奥に、きみのわるい森が茂っていて、そのなかに魔女の  
住居がありました。その森のなかの木立こたちもやぶも、半分は動物、  
半分は植物というさんご虫なかまで、それはいわば、百あたまの  
あるへびが、地のなかから、によるよろわき出ているようなも  
のでした。その一本一本の枝が、ながい、ねばねばした腕で、く  
なくなど、さなだ虫のような指が出ていました。そうして下の根  
もとから枝のずつとさきまで、ふしぶしが自由にうごきました。  
ですから、海のなかで手につかめるものは、なんでもつかんで、



しつかりとそれにからみついて放そうとはしません。人魚のひいさまは、すつかりおびえて、そのまえに立ちすくみました。もうおそろしくて、しんぞう心臓がどきどき波をうって、なんべんもそこから引きかえそうとおもいました。でもまた王子のことと、人間のたましいのことをおもうと、勇気ができました。ひいさまは、そこでまず、うるさくまつわるながい髪の毛を、しつかりあたまにまきつけて、さんご虫につかまらないようにしました。それから、両手を胸の上で重ねて、おさかなが水のなかをつういとおつきるように、いやらしいさんご虫どもが、くなくなした指と腕とをのばそうとしているなかをつつきって行きました。まあ、このいやな虫は、みると、そのひとつひとつが、そのつかんだものを、ま

るでつよい鉄の帯でしめつけるように、そのなん百とないちいさな腕で、ぎりぎりつかまえていました。海でおぼれて、このふかい底までしずんだ人間が、白骨になって、さんご虫の腕のあいだにちらちらみえていました。船のかいや箱のようなものまでも、さんご虫はすっかりつかまえていました。おかの動物のがい骨もありましたが、人魚のむすめがひとり、つかまってしめころさされているのが、なかでもおそろしいことにおもわれました。

やがて、ひいさまは、森のなかの広場のぬるぬるすべる沼のような所へ来ました。そこには脂ぶとりにふとった水へびが、くねくねといやらしい白しらちや茶けた腹をみせていました。この沼のまんなかに、難船した人たちの白骨でできた家がありました。その家

に、海の魔女はすわっていて、一ぴきのひきがえるに、口うつし  
でたべさせているところでしたが、そのようすは、人間がカナリ  
ヤのひなにお砂糖をつつかせるのに似ていました。あのいやらし  
く、肥ぶとりした水へびを、魔女はまた、うちのひよつ子と名を  
つけて、じぶんのぶよぶよ大きな胸の上で、かつてにのたくらせ  
ていました。

「ご用むきはわかってるよ。」と、海の魔女はいいました。

「ばかなことかながえているね。だが、まあ、したいようにする  
ほかはあるまい、そのかわり、べっぴんのおひいさん、その男で  
はさぞつらいめをみることだろうよ。おまえさん。そのおさかな  
のしっぽなんかどけて、かわりに二本のつつかい棒をくつつけて、

人間のようになかつこうであるきたいのだろう。それでわかい王子をつつて、ついでに死なないたましいまで、手に入れようつての  
だろう。」

こういつて、魔女はとんきような声をたてて、うすきみわるく  
わらいました。そのひびきで、かえるもへびも、ころころとこころ  
げおちて、のたくりまわっていました。

「おまえさん、ちょうどいいときに来なすつたよ。」と、魔女は  
いいました。「あしたの朝、日が出てしまうと、もうそのあとで  
は、また一年まわってくるまで、どうにもしてあげられないとこ  
ろだったよ。では、くすりを調ちようごう合ごうしてあげるから、それをも  
つて、日の出る前、おかの所までおよいでいつて、岸に上がつて、

それをのむのだよ。すると、おまえさんのそのしつぽが消えてなくなつて、人間がかわいい足と、名をつけているものにちぢまる。だが、ずいぶん痛かろうよ。それはちようど、するどいつるぎを、からだにつっこまれるようだろうよ。さて、出あつたものは、たれだつて、おまえさんのことを、こんなきれいな人間のむすめを見たことがないというだろう。おまえさんが浮くようにかるく足をはこぶところは、人間の踊り子にまねもできまい。ただ、ひと足ごとに、おまえさん、するどい刃物をふむようで、いまにも血がながれるかとおもうほどだろうよ。それをみんながまんするつもりなら、相談にのつて上げる。」

「ええ、しますわ。」と、人魚のひいさまは、声をふるわせてい

いました。そうして、王子のことと、それから、死なないたましのことを、しっかりとおもっていました。

「でも、おぼえておいで。」と、魔女はいいました。「おまえさんは、いちど人間のかたちをうけると、もう二どと人魚にはなれないのだよ。海のなかをくぐって、きょうだいたちのところへも、おとうさんの御殿へもかえることはできないし、それから王子の愛情にしても、もうおまえさんのためには、おとうさんのこともおかあさんのこともわすれて、あけてもくれてもおまえさんのことばかりを、かんがえていて、もうこの上は、お坊さんにたのんで、王子とおまえさんとふたりの手をつないで、晴れてめおととよばせることにするほかない、というところまでいかなければ、

やはり、死なないたましいは、おまえさんのものにはならないのだよ。それがもしかちがつて、王子がほかの女と結婚するようなことになる、もうそのあくる朝、お前さんの心臓しんぞうはやぶれて、おまえさんはあわになって海の上にうくのだよ。」

「かまいません。」と、人魚のひいさまはいいました。けれど、その顔は死人のように青ざめていました。

「ところで、おまえさん、お礼もたつぷりもらわなきやならないよ。」と、魔女はいいました。「どうして、わたしのぞむお礼は、お軽けいしやう少なことではないよ。おまえさんは、この海の底で、だれひとりおよぶものがないうつくしい声をもっておいでだね。その声で、たぶん、王子をまよわそうとおもっているのだろう。」

ところが、その声をわたしはもらいたいのだよ。そのおまえさんのもっているいちばんいいものを、わたしのだいじな秘薬ひやくとひきかえにしようというのさ。なにしろそのくすりには、わたしだつて、じぶんの血をまぜなくてはならないのだからね。それで、くすりにも、もろ刃のつるぎのようなするどいききめがあらわれようというものさ。」

「でも、あたし、声をあげてしまったら、」と、ひいさまは、いきました。「あとになにがのこるのでしよう。」

「なあに、まだ、そのうつくしいすがたが、」と、魔女はいいました。「それから、そのかるい、うくようなあるきつきが、それから、そのものをいう目があるさ。それだけで、りっぱに人間の



こころをたぶらかすことはできようというものだ。はてね、勇気がなくなつたかね。さあ、その舌をお出し、それを代金にはらつてもらおう。そのかわり、よくきくくすりをさし上げるよ。」

「ええ、そうしてください。」と、人魚のひいさまはいいました。そこで、魔女は、おなべを火にかけて、魔法のみぐすりを煮はじめました。

「ものをきれいにするのは、いいことさ。」と、魔女はいつて、へびをくるくるとむすびこぶにまるめて、それでおなべをみがきました。それからじぶんの胸をひつかいて、黒い血をだして、そのなかへたらしこみました。その湯気が、なんともいえないふしぎなきみのわるい形で、むくむくと立って、身の毛もよだつよう

でした。

魔女はしじゅうそれからそれと、なにくれとおなべのなかへ投げ込んでいました。やがて、ぼこぼこ煮え立つてくると、それが\*わにの泣き声に似た音を立てました。とうとう、のみぐすりが煮え上がりましたが、それはただ、すみ切った水のようにみえました。

\*わにはこどもの泣声に似た声をだしておびきよせる  
という西洋中世のいいつたえがある。

「さあ、できましたよ。」と、魔女はいいました。

そこで、のみぐすりをわたして、代りにひいさまの舌を切りました。もうこれで、ものもいえず、歌もうたえない、おしになっ

たのです。

「もしか、かえりみちに、森のなかをとおつて、さんご虫どもにつかまりそうになつたらね。」と、魔女はいいました。「このくすりをたつた一てきでいい、たらしとおやり、そうすると、やつら、腕も指もばらばらになつてとんでしまう。」

けれど人魚のひいさまは、そんなことをしないですみしました。さんご虫は、ひいさんの手のなかで、星のようにきらきらするのみぐすりをみただけで、おじけて引っこみました、それで、苦もなく、森もぬけ、すくも田もおつて、うずまきの流れもくぐつてかえりました。

そこに、おとうさまの御殿がみえました。大きな舞踏ぶとうの間まも、

もうあかりが消えていました。きつともう、みんな寝たのでしよう。けれど、ひいさまも、いまはもうおしでしたし、このまま、ながいおわかれをしようというところでしたから、おねえさまたちを、さがしにはいっていこうとはしませんでした。もう、せつなくて、胸がはりさけるようでした。そつと、花園にはいって、おねえさまたちの花壇から、めいあいにも、ひとつずつ花をつみとつて、御殿のほうへ、指で、もうなんべんとしれないほど、おわかれのキツスをなげたのち、くらいあい色の海をぬけて、上へ上がっていききました。

ひいさまが、王子のお城をみつけて、そのりっぱな階段を上がっていったとき、お日さまはまだのぼっていませんでした。お



月さまだけが、うつくしくさえていました。人魚のひいさまは、やきつくように、つんとつよいくすりをのみました。すると、きやしやなふしぶしに、するどいもろ刃のつるぎを、きりきり突きとおされたようにかんじて、それなり気がとおくなり、死んだようになつてたおれました。やがて、お日さまの光が、海の上にかがやきだしたとき、ひいさまは目がさめました。とたんに、切りさかれるような痛みをかんじました。けれど、もうそのとき、すぐ目のまえには、うつくしいわかい王子が立っていました。王子は、うるしのような黒い目でじつとひいさまをみつめていました。はつとして、ひいさまは目を伏せました。すると、あのおさかなのしっぽは、きれいになくなっていて、わかいむすめだけしかな

いような、それはそれはかわいらしい、まっ白な二本の足とかわっているのが、目にはいりました。でも、まるつきり、からだをおおうものがないので、ひいさまは、ふつさりとかくながい髪の毛で、それをかくしました。王子はそのとき、いったい、あなたはたれかどこから来たのかといって、たずねました。ひいさまは、王子の顔を、やさしく、でも、あくまでかなしそうに、そのこいあい色の目でみあげました。もう、口をききたくもきけないのです。そこで、王子はひいさまの手をとって、お城のなかへつれていきました。なるほど、魔女があらかじめいきかせていたように、ひいさまは、ひと足ごとに、とがった針か、するどい刃ものの上をふんであるくようでしたが、いさんで、それをこらえまし

た。王子の手にすがって、ひいさまは、それこそシャボン玉のようにかかるく上がっていききました。すると、王子もおつきの人たちもみんな、ひいさまのしなやかな、かるい足どりをふしぎそうに見ました。

さて、ひいさまは、絹とモスリンの高価な着物をいただいで着ました。お城のなかでは、たれひとりおよぶもののないうつくしさでした。けれど、おしで、歌をうたうことも、ものをいうこともできません。絹に金のぬいとりした着物を着かざったうつくしい女のどれいたちがでて来て、王子と、王子のご両親の王さま、お妃さまきさきのご前で歌をうたいました。そのなかでひとり、たれよりもひときわじょうずによくうたう女があつたので、王子は手を



たたいてやって、そのほうへにつこりわらいかけました。でも、人魚のひいさまは、じぶんなら、はるかずつといい声でうたえるのにおもって、かなしくなりました。そこで、

「ああ、王子さまのおそばに來たいばかりに、あたしは、みらいえいごう、声をひとにやってしまったのです。せめて、それがわかりになったらね。」と、ひいさまはおもっていました。

こんどは、女のどれいたちが、それはけっこうな音楽にあわせて、しとやかに、かるい足どりで、おどりました。すると、人魚のひいさまも、うつくしい白い腕をあげて、つま先立ちして、たれにもまねのならないかるい身のこなしで、ゆかの上をすべるようにおどりあるきました。ひとつひとつ、しぐさをかさねるにし

たがって、この人魚のひいさまの世にないうつくしさが、いよいよ目に立ちました。その目のはたらきは、どれいたちの女の歌とくらべものにならない、ふかいいみを、見る人びとのところに語っていました。

そこにいた人たちは、たれも、酔ったようになっていました。とりわけ、王子は、ひいさまの名を「かわいいひろいむすめさん」とつけてよろこんでいました。ひいさまは、いくらでもおどりつづけました。そのくせ地に足がふれるたんびに、するどい刃ものの上をふむようでした。王子は、いつまでもじぶんの所にいるようにといて、すぐじぶんのへやのまえの、びろうどのしとねにねることをゆるしました。

王子は、ひいさまを馬にのせてつれてあるけるように、男のおこしよう小姓の着る服をこしらえてやりました。ふたりは、いいにおいのする森のなかを、馬であるきました。すると、みどりのこい木の枝が、ふたりの肩にさわったり、小鳥たちが、みすみずしい葉かげで歌をうたいました。ひいさまは、王子について、たかい山にもものぼりました。そんなとき、きやしやな足から血がながれて、ほかのひとたちの目につくほどになっても、ひいさまはわらっていました。そうして、どこまでも王子にくつついて行って、雲が、よその国へわたっていく鳥のむれのように、とんでいるところを、はるか目のしたにながめました。

うちで、王子のお城のなかにいるとき、夜な夜な、ほかのひと

たちのねむっているあいだに、ひいさまは、大理石の階段のうえに出ました。そうして、もえるような足を、つめたい海の水にひたしました。そうしているうち、はるか下の海のその、わかれて来たひとたちのことが、こころにうかんで来ました。

そういう夜のつづいているとき、ある晩、夜ぶかく、人魚のおねえさまたちが、手をつなぎあつてでて来ました。波のうえにうきながら、おねえさまたちは、かなしそうにうたいました。ひいさまが手まねきして知らせると、むこうでもみつめて、あちらでは、みんな、どんなにさびしがっているか話してきかせました。それから、毎晩のように、このおねえさまたちはでて来ました。いちどなどは、もう何年とないひさしい前から、海の上にてお

いでにならなかつたおばあさまの姿を、とおくでみつけました。かんむりをおつむりにのせたおとうさまの人魚の王さまも、ごいっしょのようでした。おばあさまも、おとうさまも、ひいさまのほうへ手をさしのべましたが、おねえさまたちのようには、おもいきつておか近くへ寄りませんでした。

日がたつにつれて、王子はだんだん人魚のひいさまが好きになりました。王子は、心のすなおな、かわいいこどもをかわいがるように、ひいさまをかわいがりました。けれど、このひいさまを、お妃きごぎがしようなんということは、まるつきりころにうかんだことがありません。でも、ひいさまとしては、どうしても王子のおよめにしていたただかなければ、もう死なないたましいのさずかる

みちはありません。そうして、王子がほかのお妃をむかえた次の朝、海のあわになつてきえなければなりませんでした。

「わたくしを、だれよりもいちばんかわいいとはおおもいにならなくて。」と、王子が人魚のひいさまを腕にかかえて、そのうつくしいひたえにほおをよせるとき、ひいさまの目は、そうたずねているようにみえました。

「そうとも、いちばんかわいいとも。」と、王子はいいました。

「だって、おまえはだれよりもいちばんやさしい心をもっているし、いちばん、ぼくをだいじにしてつかえてくれる。それに、ぼくがいつかあつたことがあつて、それなりもう二どとはあえまいとおもうむすめによく似ているのだよ。ぼくはあるとき、船にの

つて、難破なんぱしたことがあった、波がぼくを、あるとうといお寺のちかくの浜にうち上げてくれた。そのお寺にはおおせい、わかいむすめたちが、おつとめしていた。そのなかでいちばんわかい子が、ぼくを浜でみつけて、いのちをたすけてくれた。ぼくは、その子を二どみただけだった。その子だけが、ぼくのこの世の中で好きだとおもったただひとりひとりのむすめだった。ところで、おまえがそのむすめに生きうつしなのだ。あまり似ているので、ぼくの心のこつていたせんせんのむすめのすがたが、いまではどうやらとおくにおしのけられそうだ。そのむすめは、とうといお寺につかえているむすめだから、ぼくの幸運の神さまが、その子のかわりわりに、おまえをぼくのところへよこしてくれたのだ。いつまでもい

つしよにいようね。」——

「ああ、あの方は、あの方のおいのちをたすけてあげたのは、このあたしだということをお知りにならないのね。」と、人魚のひいさまはおもいました。「あたし、あの方をかかえて海の上を、お寺のある森の所まではこんであげたのだわ。あたし、そのとき、あわのかけにかくれて、たれかひとは来ないかみていたのだわ。あの方が、あたしよりもっと好きだとおつしやるそのうつくしいむすめも、みて知っている。」と、ここまでかんがえて、人魚のひいさまは、ふかいため息をしました。人魚は泣きたくも泣けないうのです。「でも、そのむすめさんは、とうといお寺につかえている身だから、世の中へでてくることはない、あの方はおつし



やった。おふたりのあうことはきつともうないのね。あたしはこうしてあの方のおそばにいる。まいにち、あの方のお顔をみていゝる。あたし、あの方をよくいたわつてあげよう。あの方にやさしくしよう、あたしのいのちを、あの方にささげよう。」

ところが、そのうちに、王子がいよいよ結婚することになった、おとなりの王国のきれいなお姫さまをお妃きごきぎにむかえることになった、といううわさが立ちました。そのために、王子さまは、りっぱな船を一そう、おしたてさせになったともいいました。

こんどの王子の旅行は、おもてむき、おとなりの王国を見けんがく学がくにいかれるということになっているけれど、じつは王さまのお姫さまにあいにくのだということでした。たくさんのおともの人に

数かずもきまっています。でも、人魚のひいさまは、つむりをふつて、にっこりしていました。

王子の心は、たれよりもよく、このひいさまに分かっているはずでした。

「ぼくは旅をしなければならぬよ。」と、王子は人魚のひいさまにいいました。「きれいな王女のお姫さまにあいにくのさ。

おとうさまとおかあさまのおのぞみでね。だが、ぜひともそのお姫さまをぼくのおよめにもらって来いというのではないよ。だが、ぼくはそのお姫さまが好きにはなれまいよ。おまえがそれにそっくりだといった、あのお寺のきれいなむすめには似ていないだろうからね。そのうち、どうしてもおよめえらびをしなければなら

なくなったら、ぼくはいつそおまえをえらぶよ。口はきけないかわり、ものをいう目をもっている、ひろいむすめのおまえをね。」

こういって、王子は、ひいさまのあかいくちびるにくちをつけました。それからながい髪の毛をいじって、その胸に顔をおしつけました。それだけでもうひいさまのころには、人間にうまれた幸福と、死なないたましいのことが、夢のようにかかびました。「でも、おしのひろいむすめさんは、海をこわがりはしないだろうね。」と、王子はいいました。そのとき、ふたりは、おとなりの王さまの国へ行くはずのりっぱな船の上にいました。それから王子に、海のしけとなぎのこと、海のそこのふしぎな魚のこと、そこで潜水夫せんすいふのみて来ていることなどを、なにくれと話しまし

た。でも、話のなかで、ひいさまはついほほえみかけました。そうでしょう、海のそのことなら、たれがなんといつたつて、このひいさまにかなうものはないでしょうから。

月のいい晩で、かじ舵の所に立っている舵とりひとりのこして、船のなかの私たちはみんな寝しずまっています。人魚のひいさまは、船のへりに腰をかけて、澄んだ水のなかを、じつとながめていました。おとうさまの御殿が、そこにみえているようにおもわれしました。御殿のいちばんのたかどの高殿には、おつむりに銀のかんむりをのせたおばあさまが立っていらしつて、はやいうしおの流れをすかして、じいつとこちらの船のりゆうこつ竜骨をみ上げておいでになるようです。するうち、おねえさまたちが、波の上に出て来ま

した。そうして、かなしそうな顔で、こちらをみて、その白い手を、せつなそうにこすりました。

ひいさまは、おねえさまたちにあいずして、にっこりわらいかけて、こちらは不足なくしあわせにしている話をしようとするので、そこへ、船のボーイがふしんらしく寄って来たので、おねえさまたちは水にもぐりました。それで、ボーイも、いま、ちらと白いものがみえたのは、海のあわであつたかとおもつて、それなりにしてしまいました。

そのあくる朝、船はおとなりの王さまの国の、きらびやかな都の港にはいつていきました。町のお寺の鐘が、いつせいに鳴りだしました。そここのたかい塔で、大らっぱを吹きたてました。

そのなかで兵隊が、旗を立てて、銃剣をひからせて行列しました。

さて、それからは、まいにち、なにかしらお祝ごとの催しがありました。舞踏会ぶとうかいだの、宴会だの、それからそれとつづきました。でも王さまのお姫さまは、まだすがたをみせません。うわさでは、どこかとおい所の、あるとうといお寺にあずけられていて、そこで王妃たるべき人のいっさいの道を、修めておいでになるということでした。するうち、そのお姫さまもやっとおかえりになりました。

人魚のひいさまも、いったいどんなにうつくしいのか、はやくそのひとをみたいものだど、気にかかっていますでしたが、いまみて、いかにも人からの優美ゆうびなのに、かんしんしずにはいられませんでした。

した。はだはうつくしく透すきとおるようですし、ながいまつ黒なまつ毛の奥には、ふかい青みをもった、貞ていじつ実な目がやさしく笑えみかけていました。

「あなたでしたよ。」と、王子はいいました。「そう、あなたでした。ぼくが死がいても同様に海岸にうち上げられていたとき、すくってくださいったのは。」

こう、王子はいつて、顔をあからめている花よめを、しっかりと胸にかかえました。

「ああ、ぼくはあんまり幸福すぎるよ。」と、王子は、人魚のひいさまにいました。「最上の望みが、しよせん望んでもむだだとあきらめていたそれが、みごとかなったのだもの、おまえ、ぼ

くの幸福をよろこんでくれるだろう、だっておまえは、どのだれにもまさって、ぼくのことをしんみにおもっていてくれたのだもの。」

こういわれて、人魚のひいさまは、王子の手にくちびるをあてましたが、心臓しんぞうはいまにもやぶれるかとおもいました。ふたりのご婚礼のあるあくる朝は、このひいさまが死んで、あわになつて、海の上にくく日でしたものね。

のこらずのお寺の鐘が、かんかん鳴りわたりました。先ぶれは町じゆう馬をはしらせて、ご婚約こんやくのことを知らせました。あるかぎりの祭壇さいだんには香油こうゆが、もつたないような銀のランプのなかでもえていました。坊さんたちが香炉こうろをゆすつているなかで、花



よめ花むこは手をとりかわして、大僧正だいそうじようの祝福をうけました。人魚のひいさまは、絹に金糸の晴れの衣裳いしやうで、花よめのながいすそをささげてもちました。でも、お祝の音楽もきこえません。儀式も目にうつりません。ひいさまは、うわの空で、いちずに、くらい死の影を追いました。いつさいこの世でなくしてしまったもののおことをおもいました。

もうその夕方、花よめ花むこは、船にのって海へ出ました。大砲がなりとどろいて、あるだけの旗がひるがえりました。船のまんな中には、王家ご用の金とむらさきの天幕てんまくが張れて、うつくしいしとねがしけていました。花よめ花むこが、そこですずしい、すずかなひと夜をおすごしになるはずでした。

帆は風でふくれて、船は、鏡のように平らな海の上を、かるく、なめらかにすべって行きました。くらくなると、さまざまな色ランプがともされて、水夫たちは、甲板にでて、おどけた踊をおどりました。人魚のひいさまも、はじめて海からでて来て、この晩のような華はなやかな、たのしいありさまを目にみたときのことを、おもいうかべずにはいられませんでした。それで、ひいさまもついなかまにまじって、おどりくるいたくなりしました。ひいさまは、それはまるで、つばめが追われて、身をひるがえして逃げるときのような身がるさでおどりまわりました。そのみごとな踊りぶりを、みんなやんやとさわいでほめました。姫にしてもこれほどみごとに踊ったのははじめてです。おどりながら、きやしやな足は、

するどい刃もので切りさかれるように感じました。けれどそれを痛いともおもいません。それよりか、胸を切りさかれる痛みをせつなくおもいました。

王子をみるのも、今夜がかぎりということ、ひいさまは知っていました。このひとのために、ひいさまは、親きようだいをも、ふるさとの家をも、ふり捨てて来ました。せつかくのうつくしい声もやってしまったうえ、くる日もくる日も、はてしないくるしみにたえて来ました。そのくせ、王子のほうでは、そんなことがあつたとは、ゆめおもってはいないのです。ほんとうに、そのひととおなじ空気を吸っていて、ふかい海と星月夜の空をながめるのも、これがさいごの夜になりました。この一夜すぎれば、もの

をおもうことも、夢をみることもない、ながいながいやみが、たましいをもたず、ついもつことのできなかつた、このひいさまを待っていました。船の上では、でも、たれも陽気にたのしくうかれて、真夜中まよなかすぎまでもすごしました。そのなかで、ひいさまは、こころでは、死ぬことをおもいながら、いっしよにわらっておどりました。王子がうつくしい花よめにくちびるをつけると、王女は王子の黒い髪をいじっていました。そうして、手をとりあつて、きらびやかな天幕てんまくのなかへはいりました。

船の上は、ひっそり人音もなくなりました、ただ、舵かじとりだけが、あいかかわらず、舵をひかえて立っていました。人魚のひいさまは、船のへりにその白い腕をのせて、赤らんでくる東の空をじ

つとながめていました。そのはじめてのお日さまの光が、じぶんをころすのだ、とひいさまはおもいました。そのときふと、おねえさまたちが、波のなかから出てくるのがみえましたが、たれもひいさまとおなじように、青い顔をしていました。しかも、そのうつくしい髪の毛も、風になびかしてはいませんでした。それはきれいに切りとられていました。

「あたしたち、髪を魔女にやってしまったのよ、あなたをたすけてもらおうとおもってね。なんでもあなたを今夜かぎり死なせないのだから。すると魔女が、ほらこのとおり、短刀をくれましたの。ごらん、ずいぶんよく切れそうでしょう。お日さまのほらないうち、これで王子の胸をぐさりとやれば、そのあたたか

い血が足にかかつて、それがひとつになって、おさかなの尾になるの。するち、あんたはまたもとの人魚のむすめになって、海そのこのあたしたちの所にかえて、このまま死んで塩からい海にあわになるかわりに、このさき三百年生きられるでしょう。さあ、はやくしてね。王子が死ぬかあんたが死ぬか、お日さまののぼるまでに、どちらかにきめなくてはならないのよ。おばあさまは、あまりおなげきになったので、白いお髪ぐしがぬけおちておしまいに なったわ。あたしたちの髪の毛が魔女のはさみで切りとられてしまったようにね。王子をころして、かえっておいでなさい。早くしてね。ほらもう、あのとおり空に赤みがさして来たわ。もうすぐ、お日さまがおあがりになるわ。すると、いやでも死ななくて

はならないのよ。」

こういって、おねえさまたちは、いかにもせつなそうにため息をつくど、波のなかにすがたをかくしました。

人魚のひいさまは、天幕てんまくにたれたむらさきのとばりをあけました。うつくしい花よめは、王子の胸にあたまをのせて、休んでいました。ひいさまは、腰をかがめて、王子のうつくしいひたいに、そつとくちびるをつけました。東の空をみると、もうあけ方のあかね色がだんだんはつきりして来ました。ひいさまは、そのとき、するどい短刀のきつさきをじつとみて、その目をふたたび王子の上にうつしました。王子は夢をみながら、花よめの名をよびました。王子のこころのなかには、花よめのことだけしかあり

ません。短刀は、人魚のひいさまの手のなかでふるえました。――でも、そのとき、ひいさまは短刀を波間なみまとおく投げ入れました。投げた所に赤い光がして、そこから血のしずくがふきだしたようにおもわれました。もういちど、ひいさまは、もう半分うつろな目で、王子をみました、そのせつな、身をおどらせて、海のなかへとび込みました。そうしてみるみる、からだがあわになつてとけていくようにおもいました。

いま、おひいさまは、海の上のぼりました。その光は、やわらかに、あたたかに、死のようにつめたいあわの上にさしました。人魚のひいさまは、まるで死んで行くような気がしませんでした。あかるいおひいさまの方を仰ぎました。すると、空の上に、なん百



となく、すきとおるような神こうごう神こうごうしいもののかたちが見えました。そのすきとおるもののむこうに、船の白い帆や、空のあかい雲をみました。空のその声はそのままに歌のふしでしたが、でもそれはたましいの声で、人間の耳にはきこえません。そのすがたもやはり人間の目ではみえません。それは、つばさがなくても、しぜんとかるいからだで、ふうわり空をただよいながら上がって行くのです。人魚のひいさまも、やはりそれとおなじものになって目にはみえないながら、ただよう気いき息いきのようなものが、あわのなかから出て、だんだん空の上へあがって行くのがわかりました。

「どこへ、あたし、いくのでしょね。」と、人魚のひいさまは、そのときたずねました。その声は、もうそこらにうきただよう気いき

息きのなかまらしく、人間の音楽にうつしようのない、たましいのひびきのようになっていました。すると、

「大空のむすめたちのところへね。」と、ほかのただよう気息いきのなかまがいました、「人魚のむすめに死なないたましいはあります。人間の愛情をうけないかぎり、それをじぶんのものにすることはできません。かぎりないのちをうけるには、ほかの力にたよるほかありません。大空のむすめたちもながく生きるたましいをもたないかわり、よい行いによって、じぶんでそれをもつこともできるのです。（あたしたちは、あついで国へいきますが、そこは人間なら、むんむとする熱病の毒気で死ぬような所です。そこへすずしい風をあたしたちはもっていきます。空のなかに花

のにおいをふりまいて、ものをさわやかにまたすこやかにする力をはこびます。こうして、三百年のあいだつとめて、あたしたちの力のおよぶかぎりのいい行いをしつくしたあと、死なないたましいをさずかり、人間のながい幸福をわけてもらうことになるのです。お気のどくな人魚のひいさま、あなたもやはりあたしたち同様まごころこめて、おなじ道におつとめになったのね。よくも苦みをおこらえなさったのね。それで、いま、大空の氣息いきの世界へ、ごじぶんを引き上げるまでになったのですよ。あと三百年、よい行いのちからで、やがて死ぬことのないたましいがさずかることになるでしょう。」

そのとき、人魚のひいさまは、神さまのお日さまにむかって、

光る手をさしのべて、生まれてはじめての涙を目にかんじました。——そのとき、船の上は、またもがやがやしはじめました。王子と花よめがじぶんをさがしているのを、ひいさまはみました。ふたりは、かなしそうに、わき立つ海をあわをながめました。ひいさまが海にはいつてそれがあわになったことを知っているもののようにでした。目にはみえないながら、ひいさまは、花よめのひたいにせつぷんをおくつて、王子にほほえみかけました。さて、ほかの大空のむすめたちとともども、そらのなかにながれてくるばら色の雲にまぎれて、たかくのぼって行きました。

「すると、三百年たてば、あたしたち、こうしてただよいながら、やがて神さまのお国までものぼって行けるのね。」



「いいえ、そう待たないでも、いけるかもしれませんの。」と、大空のむすめのひとりがささやいてくれました。「目にはみえないけれど、あたしたちは、こどもたちのいるところなら、どの人間の家にもただよっています。そこで毎日、その親たちをよろこばせ、その愛<sup>いつく</sup>しみをうけているいい子を見つけるとんびに、そのためしるときがみじかくなります。こどもは、いつ、あたしたちがへやのなかへはとんで行くかしらないのです。でも、あたしたちが、いいこどもをみて、ついよろこんでほほえみかけるとき、三百年が一年へります。けれど、そのかわり、いたずらな、またはいけないこどもをみて、かなしみの涙をながさせられると、そのひとしずくのために、あたしたちのためしるときも、一日だけ

のびることになるのですよ。」





# 青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、\*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2005年8月18日作成

2012年5月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人魚のひいさま

DEN LILLE HAVFRUE

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>